中原　泉
一枚の写真
48

Ⅱ 医科病院開院の顛末

私が新潟歯学部長に就任した昭和54年（1979）の秋頃から，ようように医科病院のプランが本格的に動きだした。医科病院が主となる７号館は，校地の関屋中学寄りに，附属病院と接続して海側へ直角に建てられる。地下１階・地上４階で，建築面積は408坪（1,346㎡），延べ床面積1,583坪（5,224㎡）。１階が病院外来，手術室等，２階は病棟，３・４階は医科・歯科の研究室である。

昭和55年（1980）３月20日，７号館の起工式が催されて着工した。８月２日には私は，手術の甲斐なく亡くなった次男高の三回忌の法事をすませる。新館は，９ヵ月の工期をへて，同年12月に竣工した。翌年１月から，院内の医療設備・機器の搬入・設置に入る。事務部長の小田島らは，看護婦（まだ師ではない）をはじめ多数の医療スタッフの採用・確保に懸命だ。

この繁忙を横目でみながら，私は３月初めから毎週末，夜行で新潟―東京を往復した。母親が，がんで病床にあったのだ。

昭和56年（1981）５月28日，開院前に開院披露式をする手順だ。その前々日に母親が逝った。あいにくなことに，葬儀が開院披露式と重なった。私は帰新を諦めて，吉祥寺の実家で忙しく通夜の段取りをしていた。夕方，新潟の小田島から電話が入った。

彼は強ばった声音で，「先生，あした，お願いします」と念押しされた。披露式には，主催者として歯学部長名で，新潟市内の病院長等多数を招待していた。私の事情を知る小田島の直言だ…。

その夜，母親の棺に添い寝し，早朝，私は家内を残して上越線に飛び乗った。長い４時間余，途中，電線に凧が引っかかって停車した。私は車掌の背に怒り声を浴びせたが，列車は定刻に新潟へ着いた。

本館の応接室に，主賓の 猪 初男新潟大学長が待っていた。彼は，加藤譲治が私淑する耳鼻咽喉科学の大家である。私が遅参を詫びると，控えめに「どなたがお亡くなりに？…」と問われた。私は，返事に窮して痛く口ごもった。

ぶじ披露をすませると，東京へトンボ帰りした。夜半，吉祥寺の寂とした家の中に，線香の残り香が漂っていた。

それから５日後の６月２日，医科病院は開院した。武藤教授との約束から４年が経っていた。同６日に私は，新潟での第74回日本歯科保存学会の特別講演に１時間立った。そのあと９日，目眩におそわれてピカピカの医科病院外来にいく。40歳の過労…即，点滴入院。皮肉にも，私は，医科病院内科の入院第一号となった。

（写真：開院披露で挨拶する猪新潟大学長，右に疲労困憊の中原　泉）